

新版 全国衛生研究所見聞記 【其の5】 沖縄県衛生環境研究所之巻



はじめに

2006 年 7 月 20 日、日本列島の彼方此方から大雨洪水の被害が續々と報ぜられる中、齢 84 歳に達した老母をば東京驛まで見送り、切符だけ手渡して注意報發令中の長野縣へと老骨單身旅立たせた後、みずからは羽田から飛行機に乗り一路快晴の沖縄へと遁走する此の探訪子は、如何に仕事だからとはいえ親不孝者の典型である。『おばあ』を大切にする琉球の人達からは到底「メンソーレ」と歓迎して貰えないだろう。

同日夕刻からの宜野湾市での別件仕事（肝臓病関連）を無事に？終えた探訪子は、翌 21 日午前中に本誌編集部の大森女史／柘植氏と豫定通り合流することを得、久茂地の『風弾』で昼食（琉球ソバ）を済ませ、柘植氏運轉のレンタカーで市街地を抜け一路南城市の沖縄衛環研を目指した結果、主には柘植氏の運轉技術、副には電子ナビゲーターの御蔭で 1 分の狂いもなく、那覇市郊外の小丘陵の上に聳える沖縄衛環研の古びた建物の門前に立った。午後 1 時。



写真 1 沖縄県衛生環境研究所

熱暑は厳しいが、時折吹き過ぎて行く風が頬に心地よい。あ、今日の案内役である企画管理班の下地實夫研究主幹が玄関先まで我々を出迎えて下さっている。



写真 2 下地實夫企画管理班研究主幹と玄関脇の龍一對。

（Ⅰ）平良健康所長との心の中での對話： 『置き手紙』の齎した不思議な心理効果

探訪子等が訪れた此の日、所長の平良健康（たいら・たけやす）先生は生憎と不在だった。否、「生憎と」と書くとは誤解が生ずるので正確に書けば、平良先生の不在豫定を知りつつ我々は此の日を訪問日として選んだのであって、その責めは編集部にはなく、ひとえに探訪子にある。

……と書いても、それだけでは読者はチンプンカンプンであろうから、思い切って裏話を開陳してしまえば、編集部からのアンケートに対する沖縄衛環研の初期回答は「御訪問は不要、但し誌上での紹介には應ずる」というものだったが、然様な内部事情に無頓着な探訪子が某月某日突然に、「7 月 20 日に沖縄に行く用事が出来たから 21 日なら沖縄衛環研訪問が可能です」と暢氣なことを編集部に提案し、



写真3 当日は不在だった沖縄衛環研所長平良健康先生。

それを受けた編集部が恐る恐る沖縄衛環研に打診し直し、「そういうことであれば、其の日は所長が不在なれど、訪問取材を受けることにしませう」との回答を下地氏から頂戴したという、そういう経緯で此の日の訪問が実現した。従って、云うなればこれは『見聞記の押し売り』である。そういう結果になってしまったことに若干の後ろめたさを感じつつ探訪子は沖縄衛環研の敷居を跨ぐ。

ところが、然様な探訪子の心の屈託を見抜いたかの如く、平良所長は筆者への『置き手紙』を御用意して下さっていた。最初に通された主（あるじ）不在の所長室で、上原隆企画管理班班長は、A4版3枚綴りの文書を両手に捧げ持ちつつ「私は此處に所長から託された手紙を持っておりますが、これは、お歸りになられる際にお渡しした方がよいと思うので、今は渡しません」とおっしゃる。其の時は意外に思ったが、今にして思えば、先入観なしに所内を見て貰おうとの配慮からそうなったものと思考する。しかし其の『直ちに讀んでは不可ない手紙』の存在は、探訪子の心に不思議な波瀾を齎した。一糸そこに何が書いてあるのだろうかとの思いが、幾度も幾度も頭をもたげる。そして遂に、見えざる平良所長と心の中で對話しながら所内見學をしている自分に気付いたのである。

此の無言對話は、数時間後、所内見學を終えて其の手紙を上原班長から手渡され讀み始めた瞬間に、忽ちにして有言化した。例えば、筆者は「圖々しくも御不在時に押し掛けましてまことに申し譯ありません」と繰り返し平良所長に無言で謝り續けていたのであるが、それに對する返答が手紙の冒頭に書いてあった。「暑熱のなか遠路、取材

にお運びいただき、まことにありがとうございます。所長の平良健康です。あいにく九州ブロック衛生環境研究所所長會議が長崎で開催され、出席のため留守にいたしております。よろしくお願いいたします」と……

これで少しは氣が楽になったかという、その逆である。嗚呼、やっぱり、平良所長の在所時に來るべきであった、との悔恨が却って強まった。私は今、再び平良所長との無言對話の中にいる。

（Ⅱ）企画管理班上原班長から概要等の説明を受く：悪性新生物の全數調査に吃驚

探訪子の白昼夢をよそに、上原班長の説明は研究所の沿革、概要、各部署の業務内容へと淀みなく續いていた。窓外からは眠りを誘う蟬の聲が聞こえる。

本シリーズの神奈川之巻でも書いたが、此の部分の聞き取りは探訪子の最も苦手とするところである。しかし、やがて企画情報部門の業務内容の説明の中



写真4 上原班長。

で、「本縣では悪性新生物の mortality だけではなく morbidity の調査も昭和 63 年以來繼續して行っております」と聞いた時、俄かに目が覚めた。「それは拠點病院を選んでの定點觀測ですか？」と質問すると、「いや全數調査です」との返事に吃驚！

これは大變な調査である。座して届け出を待つだけでは決して全數把握は出來ない。こちらから出掛けて行って情報収集するという能動的活動がなければ達成不能の事業であって、實際、下地主幹の部屋の壁にぶら下がっている白板豫定表には、毎週月曜日から木曜日までが「何處其處病院へ出張採録」という豫定で埋められていた。

沖縄は長壽縣として夙に有名である。長壽の背景にある遺傳因子や環境因子は何なのか、研究者のみならず一般人の關心も惹きつけて已まないテーマの一つであり續けて來たが、必ずしも「沖縄人」＝「長壽」という等式が成立しない傾向も近頃見え始めているという。それは何故なのか？

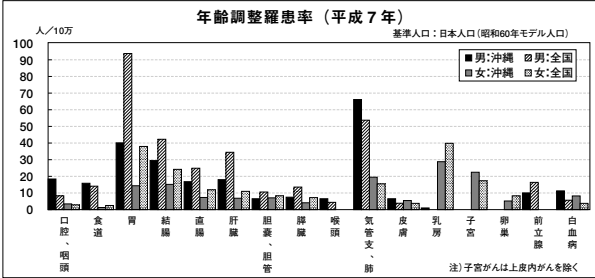
沖縄県のがん罹患状況

沖縄県がん登録事業

県内のがん患者について、患者ごとに発病、治療、死亡（全過程）の医療情報を記録、これらのデータに基づき受療状況や生存率を解析して、がんの予防と治療に役立てることを目的として実施しています。
—昭和63年から平成12年までの登録件数は 34,840件（男 18,573件、女 16,267件）—

県内がん罹患の特徴

全部位の年齢調整罹患率は、男女とも全国平均値より低いですが、男の気管支・肺、口腔・咽頭、白血病、女の子宮、白血病、気管支・肺は高くなっています。年齢別にみると、男の気管支・肺が60歳以降、口腔・咽頭が45歳以降で、女の子宮が25歳以降、白血病が45歳以降で高くなっています。



平成5年がん罹患患者の5年生存率

主要部位別（肺・胃・肝・膵・結腸・乳房・子宮）では、5年相対生存率で乳房80.5%子宮79.7%と高く、肺・肝・膵は30%以下と極めて悪い生存率を示しています。

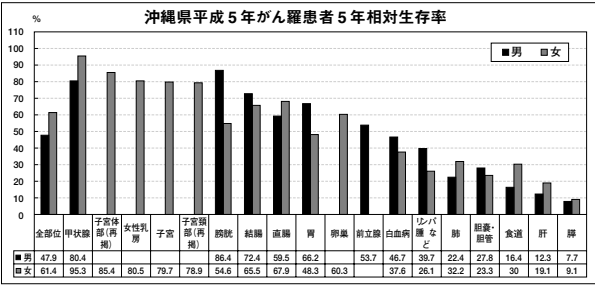


図1 沖縄県は胃癌頻度が極端に低率（だった？）

国立がんセンターによる定観測やコホート・スタディーの1定観として沖縄県は選ばれているから、然様な國主導の調査からも上述の問題への答が得られるではあろうが、沖縄衛研が約20年にもわたって営々と独自に行って来た此の全数調査の成績は、他にかけがえのない貴重なデータとして今後も活用され続けるだろう。

（Ⅲ）衛生科学班を訪問し“巨人” 安里龍二先生に出會うの光榮に浴す

衛生科学班の班長、巨軀温顔の安里龍二（あさと・りゅうじ）先生は1947年1月生まれ。知る人ぞ知る寄生虫研究の大家であって、且つ、學究一筋没頭タイプの研究者にありがちな数々の『ホノボノ』としたエピソードの持ち主』でもあらせられる。例えば、訪問当日のアフター・ファイブ（註：正確にはアフター・イレヴンだったかもしれない）に開催した若手所員との非公式懇談會の席で耳にした話の一つに、『キャベツ泥棒と間違えられ警察官に職務質問さるる之巻』というのがある。これは、広東住

血線虫の中間宿主の一つであるナメクジを求めてキャベツ畑に入り込み、寝そべって、あるいは蹲踞の姿勢で、なにやらガサゴソと手を動かしている安里先生の姿が、偶々そこを通りかかったパトカー内の警官の眼には『紛れもない不審者』として映ったという逸話である。しかし考えてみれば、然様な不審者姿を見逃すことなく職務質問した警官も、ナメクジを見て見ぬふりが出来なかった安里先生も、夫々の職務に忠實だっただけのことなのである。

序でだからもう一つ、『奥様が國語教師であらせらるる之巻』。これは、安里先生の御書きになる文章の一文一文が寄生虫のように細長いので、論文投稿の前には國語教師である奥様の校閲が必須であるという話。そしてもう一つ、安里先生がハンドルを握られる車の走りっぷりは……



写真5 シルバーシートの譲り合い。
中央が安里先生（1947生）。
左へ順に、大野惇氏、平良勝也氏、下地氏。
右端はカリユシウエアを纏い即席琉球人氣取りの探訪子（1948生）。

閑話休題、皆を着席させ愈々衛生科学班の活動について説明をという段になった時、安里先生開口一番「私はもう後進に道を譲らねばならない歳になったから、ここにいる若い人達に説明させます」とて、大野惇主任研究員と平良勝也研究員の方に顔を向け、説明を促す。

閑話復題、「嗚呼なんとも羨ましい光景だなあ」と探訪子は無言のうちに嘆息した。探訪子も「そろそろ後進に道を譲らねばならない歳」に到達しつつあるが、肝心の〔後進〕=〔若い人達〕が殆どいない。いるのは主に自身と同じ『團塊の世代』だけだ。この違いは奈邊にあるのだろうか？ひょっとすると此處が沖縄だからなのかもしれない。沖縄が若者を縣

外から魅きつける？ 那样的いば、前述したアフター・イレヴンの會には、28歳だが18歳に見える旭川出身者＝岡野研究員と、同じく28歳だが38歳に見える仙台出身者＝仁平（にだいら）研究員の姿があったし、前回（＝昨年）來沖した時には確か名古屋出身の妙齡女性の姿もあったと記憶する。そうか、いい考えがある。探訪子の研究室を東京から沖縄に移轉すれば蓋し全國から…… やめよう、それは所詮『出来ない相談』なのだから。

閑話休題私語厳禁、既に大野氏と平良（勝也）氏の説明が始まっているのだから、我々はそれを傾聴せねばならない。

(Ⅳ) レプトスピラ、糞線虫、広東住血線虫、ハブクラゲ、ウンバチイソギンチャク、カツオノエボシ、オニヒトデ、……

うわあ、まるで亜熱帯生物科學館に迷い込んだような気がするぞ。ここ沖縄衛環研は全然「衛研らしく」ない。らしくない理由は様々に説明出来る。例えば探訪子なら、「らしい衛研は御役所の匂いがするが、ここ沖縄衛環研は海・土・空（うみ・つち・そら）の匂いがするから」と嘯く。しかし、もっと丁寧で正確な説明も存在し、それは平良健康所長によって用意されていた。前述した『置き手紙』から以下に引用する。

ご案内のように地方衛生研究所の機能は、いわゆる厚生省次官通達という試験検査、調査研究、公衆衛生情報の発信、研修業務などを網羅することとされ、当研究所もこの柱のもとに業務を行っております。

しかしながら他縣とくらべると研究業務に特色立ったものがあり、それは亜熱帯性氣候、動植物相の多様性、サンゴ礁にかこまれる島嶼性、米軍基地の存在などが與える特性に關連すると考えられます。（下線探訪子）

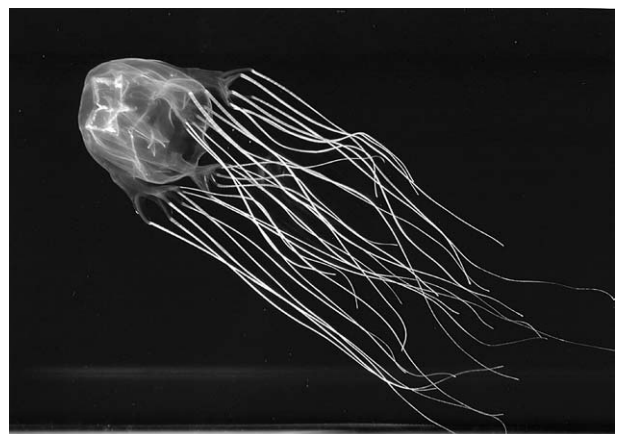
實に全く平良所長のおっしゃる通り、沖縄に沖縄の特色を與えている地理的生物學的社會的諸条件の特殊性が、同時に、沖縄衛環研をして如何にも沖縄的に特色立たしめている。つまり、もし沖縄にレプトスピラも糞線虫も広東住血線虫もハブクラゲもウンバチイソギンチャクもカツオノエボシもオニヒトデも（そして序でのことに米軍基地も）存在しなけ

れば、沖縄衛環研は忽ちにして「全國どこにでもある衛研」と區別のつかない存在に變容するであろう。しかし、實際はそうではないのだから、つまり眼前に然様な様々の有害有毒生物（や基地）が存在しているのだから、沖縄衛環研は誰彼を眞似するのではない（註：眞似したくても眞似する相手がいない）オリジナルの方法でそれらに對處し續けて來たのである。と書くの大袈裟すぎるだろうか。

別の觀點から云えば、やれSARSだ、すわトリインフルだ等と、突然の如く舞い込んで來る「majorだが長續きしないissue」への對處に右往左往させられがちな他所の衛研とは異なり、沖縄衛環研の方は、「minorだが繼續的に存在するissues」を常日頃から身近に澤山抱え込んでいるから、一つ一つのテーマ毎に腰を据えてじっくりと研究することが可能であり且つ必須でもあるという、大變恵まれた研究環境を享受しているとも云えるのであって、實際、寄生虫研究一筋の安里先生の存在がそれをよく証左している（註：總計243文字から成るこのパラグラフは寄生虫的ワン・センテンス文牒で書いてみた）。

扨て、大野氏と平良氏から受けた説明は、レプトスピラ（細菌）、寄生虫、ハブクラゲ等海洋危険生物の生活環や棲息實態や健康被害に關する具體的なものであったが、探訪子は、それを此處に再現しようとは思わない（編集部が誌面の何處かでカバーしてくれるかもしれないが）。その代わりに、少しく氣になることを聞いたので、その點についてだけは言及しておきたい。

様々な海洋有毒生物の中で、これまでの調査により最も頻度高く健康被害を齎していることが判明しているのはハブクラゲである。



寫眞6 ハブクラゲ。

刺された直後に呼吸停止に至った重症例や死亡例も出ている。問題なのは、然程に有毒であることが分かっている此のハブクラゲが何處で生まれているのかが未だ解明されていないことである。それを知ることが防除の為には必須であるにも拘らず、である。

勿論、それを知る努力は為されている。例えば、岩永節子女史等は、[受精卵→プラヌラ幼生→初期ポリプ→定着型ポリプ→クラゲ遊出]という多段階プロセスの中で、特に[初期ポリプ→定着型ポリプ]という変態プロセスに着目した。何故なら、この変態を許容乃至促進する至適環境条件を知る事が出来たなら、その環境条件に一致乃至近似する特定の場所を海洋の中に求めればよいという理屈だからである。そこで、実験室内で様々な環境を用意し調べてみると、正常海水よりは遥かに低い塩分濃度環境の中で[初期ポリプ→定着型ポリプ]という変態が観察された。ならば、汽水域を探せ！ということになる。

候補海域が幾つか探索された。しかし今に至るも未だハブクラゲのポリプは発見されていない。

嘗て、東大等によって実施された、ウナギが何處の海域で生まれているのかを解明する研究には、國が巨額の研究資金を投じ、その括目すべき研究成果は*Nature*に載った(*Science*だったかもしれない)。願わくば、その何分の一でもいいから國が沖縄衛環研に研究費を補助し、ハブクラゲ生誕場所の発見を是非とも達成させてあげて欲しい。ウナギと違ってハブクラゲの方は死亡例を含む健康被害を國民に及ぼしていることに鑑みれば、誰からも批難されぬ、まさに恰好の税金の使い道ではないか！

おや？探訪子は復た餘計なことを書いてしまったのだろうか。

(V) マングースからE型肝炎ウイルスが採れたという世界初の報告

もう一つ、「いかにも沖縄ならでは」と思わせられる仕事が、この沖縄衛環研から報告されている。それは、衛生科學班の大野氏、平良氏、仁平氏、沖縄縣中央食肉衛生検査所の中村正治氏、平良雅克氏、琉球大學醫學部の佐久川廣醫師、東芝病院研究部の高橋和明主任研究員と不肖探訪子の6人が主に關與した共同研究で、昨年、沖縄のマングースからE型肝炎ウイルス(HEV)のgenome RNAが採取され

全塩基配列が解讀されたという仕事である。それまでに既に、ヒト(世界各地)、ブタ(世界各地)、イノシシ(世界各地)、シカ(日本)、ウマ(エジプト)、ラット(ネパール)からHEV RNAが採れてはいたが、マングースからの採取はこれが世界初の報告となったので、實にこれは沖縄衛環研(と食肉衛検)の快挙である。

沖縄のマングースは、1910年にインドから輸入された。東大の或るエライ先生が「Indian mongooseはコブラの天敵として有名だから、沖縄に導入すればきっとハブを退治してくれる筈だ」と提案してそうだったとの由。ところがである、インドとは違い沖縄にはコブラより美味なる食べ物(例えばヤンバルクイナとか)が澤山あったらしく、マングースの對ハブ効果は全くの期待外れだった。剩え、HEVまで持っている。ひょっとすると、そのHEVはインドからマングース自身が運んできたものかもしれない。結局のところ、百害あって一利なし。マングース輸入のポジティブな効果としては、「所謂『有識者』の發言は眉に唾して聞くべし」、「安易な動物(生物一般)の移入は避けるべし」、この2點が教訓として残っただけ。明らかにネガティブな代償のほうが大きかった。

それはともかく、本土(という言葉は死語なのか?)では見られない動物種が(移入種であれ固有種であれ)沖縄には他にも数多く存在するから、HEV等の人畜共通感染病原株の宿主域の探索には、今後も沖縄衛環研との共同研究が不可欠であると探訪子は考えている。そう考えるのは、沖縄を繰り返し訪れたいという正直な邪念にも後押しされているに違いないが……

さて、衛生科學班の紹介はそろそろ切り上げないと(まだまだ回らねばならぬところがあるし)、体力も紙幅も尽きてしまう。

あ、しかし探訪子は何か肝心なことを書き忘れていたのだろうか?……ハブ?御意!確かにハブには未だ言及していないし、ハブ研究もこの衛生科學班の重要な仕事の一つである。されどハブ研究は別の建物で独立に行われており、本日の見學の最後に其處を訪れることになっているので、暫くの間御辛抱頂きたい。

(Ⅵ) 環境科学班の宮城俊彦班長から聞いた話は多岐多彩：何から書いてよいか探訪子は迷いに迷う

まさに『とっておきの話』があるのだが、それは『またの機会』にとっておくことにして、まずは基地と赤土と黄砂の話から。

米軍基地は外界から閉ざされた空間では全然なく、物理的には連続的に、社会的には非連続的に基地外環境と繋がっている。かたや物理的連続性の故に、基地の中で生起する環境科学的事象の一切について沖縄衛環研は関心を持たざるを得ないが、こなた社会的非連続性の故に直截的な行動を執れないというジレンマがある。それでも、基地内から基地外へ漏れ出る環境物質のモニタリングは可能であり且つ実施されてもおり、屢々異変をキャッチすることもある。「そんな時にはどうするのですか？」という探訪子の質問に、宮城先生曰く「昔は無視されることもありましたが、今は仲良く話せる相手が基地内にいますので、データを見せ合いながら対策を講ずることも可能になって来ています」との由。



写真7 壁に貼られた数々のパネルを使い環境科学班の多岐多彩な仕事について精力的に説明する班長宮城先生と、少々茫然自失気味の探訪子。中央は下地氏。

基地が無くて済めばそれに越したことはないが、有るという現実の中では、斯様な協調路線が、苦しくも可能な唯一の選択肢なのであろう。環境科学班の一画の廊下には、米軍の原子力潜水艦の年次別入港回数を示すグラフも張り出してある。それを見るにつけても、大變だなあ沖縄は、と嘆息

せざるを得ない。

赤土の流出が齎す珊瑚礁の被害の話聞いた時にも「大變だなあ沖縄は」という同じ感懷を禁じ得なかった。何故なら、沖縄の土壌が赤土を多く含むことは變えようのない既成事実だし、颱風の襲来等によって大雨が降れば赤土流出の起こることも防ぎようのない事象だし、沖縄が颱風の通り道に位置することもア・プリオリ、颱風の発生もア・プリオリ、なにもかもがア・プリオリなのだから。

中国からの黄砂飛来もまた然り。これもア・プリオリの自然現象である。米軍基地の存在も、それが住民の頭越しに決定されて其處に在るという點からすれば、これもまた(社会的な)ア・プリオリである。

嗚呼、かくて沖縄は、社会環境的にも自然環境的にも不可避のア・プリオリに満ちている。しかし、全てが不可避な譯ではない。例えば、颱風の発生を阻止したり進路を変えたりすることは物理的に不可能だが、風力の強弱を推量したり進路を予測したりすることは科学的に可能であって、それにより、颱風の予測通過路に位置する地域住民が蒙るであろう被害をば最小限に留める為の『事前の備え』が可能になるのである。颱風の場合、それは氣象庁の役目だが、この『颱風』という言葉を『病原体』や『有毒物質』等に置換すれば、それは全く衛研の役目そのものである。

起こり得る健康被害(と環境被害)のシグナルを未然にキャッチする。これは衛研(環研)の担う重要な任務の一つである。

(Ⅶ) ウツボ4トンを費やしても0.35ミリグラムのシガトキシンしか採れないから化学合成してELISAの系を組んだ：東北大薬理学部との共同研究

フグには毒(=テトロドトキシン)がある。これは本土の常識だ。沖縄の常識は違う。

沖縄の海に住むフグ乃至その仲間達(ハリセンボン等)からは、少なくともこれまでの調査では、テトロドトキシンが検出されていない(グルメには朗報!)。その代わりに、ミーバイやウツボを筆頭とする多くの魚類から、シガトキシンという別種の神経毒が検出されており、しかも、マウスを用いて計量されたシガトキシンの毒性はテトロドトキシンのそ

れを遥かに凌駕するとの由（グルメには注意報！）。企画管理班の上原班長も嘗て『ミーバイ汁』の食後に片足が麻痺したとの経験を御持ちだという。

ところが、魚の1個体あたりのシガトキシンの含量は極めて微量であって、大城直雅主任研究員によれば、東北大学名誉教授安元健先生のグループはウツボを4トン集めて来てその肝臓を潰しても僅かに0.35ミリグラムしか抽出精製できなかった（註：抽出精製プロセス中でのロスもあるから単純に0.35ミリグラムを4トンで割るという割り算をしては不可ない）。これはシガトキン検出の大きな障害である。

量は微量でも比活性が高いからマウスを用いた生理學的試験によりシガトキシンの存否を間接的に知ることには出来る。しかし、シガトキンという毒素を物質として直接検出する系があるに越したことはない。然様な系の開発の最大の障害は、上述の如く「充分量のシガトキシンを天然から得るのは不可能に近い」という点にある。

この深刻な隘路を突破したのは、東北大学理学部平間正博教授のグループによる世界初の『シガトキン化学合成』の成功だった。あとは一瀉千里で今日まで、東北大学と沖縄衛環研の共同研究が、ELISAに化学発光を組み合わせて可及的高感度のシガトキン検出系を開発せんとする道を一路邁進するのであった。

おっと、これ以上ウツボにうつつをぬかしては、ハブの為の紙幅があぶない。

（Ⅷ）温顔にして聲も優しき勝連盛輝先生だが眼光は鋭く恰かもハブの天敵の如し

沖縄衛環研の建つ丘を下地氏運転の車でウネウネと下り降り、ハブ研究棟の門をくぐる。出迎えてくださった勝連盛輝（かつれん・せいき）先生は衛生科学班の主任研究員である。



写真9 勝連先生の頬に置物の龍が接吻する之圖？

珈琲を頂戴しながら聞く勝連先生のハイ・バリトンの聲と穏やかな語調には聞き覚えがある。誰かのそれと非常によく似ているのだが、それが誰なのかどうしても思い出せないのは、勝連先生の眼光の鋭さの所為だろうと思った。

この眼の奥の頭脳によって考案工夫された様々なハブ捕獲メソッドにより、沖縄のハブの数は確実に減少しつつあり、2001年度には戦後初めてハブ咬傷事例が年間100人を下回った。



写真8 大城主任研究員（右）。

写真10

この写真をご覧になりたい場合には、
当編集室へお問い合わせください。
E-mail: modern_media@eiken.co.jp

写真10 2002年11月7日の沖縄タイムスの記事。
「沖縄タイムス」<http://www.okinawatimes.co.jp/>

我々の取材中にも町役場の人が、「かかっていました」と3台のハブ捕獲器を搬入してきた。おお實に、新聞に「市町村の対策奏効」と書かれているとおりのことが、今、我々の眼前で展開されている。



写真 11 トラップにかかったハブを釣り上げる。このトラップには餌としてハツカネズミが入っていた。

しかし、勝連先生達の仕事はハブ捕獲法の工夫にあるだけではない。ハブ毒を抽出精製してウマに免疫し抗血清を作るという重要な仕事、更には、複数回ハブに咬まれる人達の為に（即ち、異種抗血清の反復投与が惹起するアナフィラキシーを回避する為に）humanized antibodiesを作成する研究も行われている。

屋外実験場に出てみると、其處には古代ギリシャの野外劇場（の遺跡）の如き異様な空間が広がっていたが、その一角に蚊帳のようなネットが張りめぐらされている。その中にはハブが『放し飼い』されているのだ。



写真 12 テレビ・モニターでハブの行動を四六時中観察。

ハブは夜行性だから、夜間の行動を観察せねばその生態が見えてこない。この設備を使って試みられている実験は幾つかあるが、重要と思われるものを一つ紹介すると、それは『誘引物質と嫌忌物質』を同定する為の実験である。即ち、放し飼いフィールド内の特定の場所に、或る化学物質を置いておく。もし、夜間、ハブが其の場所に集まって来るようならそれは誘引物質であり、逆に決して其處に近づかないようであればそれは嫌忌物質である。誘引物質が見つければトラップに使える（＝ネズミを餌にせず済む）し、嫌忌物質が見つければ、家屋内あるいは敷地内へのハブの侵入を防ぐのに役立つ（注：ハブ咬傷の約1/3は人家の中あるいは近傍で発生している）。「で、如何でしたか？首尾のほどは」との探訪子の問いに、勝連先生曰く「残念ながら未だどちらも見つかりません」と。

大丈夫。いずれ必ず見つかる。しかし、それが見つかった暁には、既に、勝連先生達の今一方の努力（＝捕獲作戦）が稔って、沖縄の野生ハブが殆んどいなくなってしまうという『嬉しい誤算』が待っている可能性もある。

（Ⅹ）辞去、そしてアフター・ファイヴ・アンティル・フエン？の反省會

豫定した時間割通りに見學を終えた探訪子と編集部大森女史と柘植氏の三人を乗せた車は、ハブ研究棟の玄関先に立ち並ぶ下地主幹と上原班長と勝連主任研究員に見送られながら、一路那覇市の中心部を目指す（注：緊張が解けた所為でか、一度だけだが柘植氏運転の車は道を間違えた）。

夕刻六時。市内某所に辿り着いた三人は、ドゥルマカシーやウンチェバイリチー等、ほんの2-3品を注文しただけで反省會を開始した。しかし、それだけで反省會を終えてよい譯は勿論ない。30分位経過した頃から三々五々、沖縄衛環研の若手研究者の面々が集まり始め、卓上の皿数も増えていった。中央食肉検の中村氏も、ハートライフ病院の佐久川先生（前琉球大學）も遅ればせながら参加した此の懇親會は、別の某所に場所を替え、日付が変わってもなお続いた。裏話も聞いた。冗談も云い合った。歌も唄った（探訪子はドゼウススキヒの振付つきの安來節）。そして最後に、一人当たり3,000円の會費を

払い合って解散した。

陽が昇るまでには、まだ十分な時間が残されている。それが探訪子には（恐らく他の誰彼にも）一寸だけ口惜しかった。



写真13 本文とは殆んど無関係だが、7月某日沖縄縣久米島の夜明け（註：白黒だと夜明けに見えないのが残念）。



本稿で探訪子が旧漢字を多用していることを訝しく思う読者の為に、最後に少しく釈明させて頂きたい。

探訪子は今（7月30日午後5時）、中國は大連の某ホテルで本稿を書いている（本来ならそろそろ成田に到着する飛行機の中にいるべき筈だったのだ

が、長春から乗った飛行機が雷雨で大幅に遅延し、それ故に大連發成田行きに乗り遅れたのであって、決して故意にではない）。御承知の如く中國では漢字の略舛化が進んでおり、例えば、長春や大連の街中を歩きながら目にする看板の文字は日本人には50%位しか解讀できない。その理由は、日本も漢字略舛化を行ってきたが、元は同じ漢字でも中國と日本では略舛化の結果生み出された文字が同一ではないからだ。これは日中兩國にとって大變不幸なことだ。この傾向が更に続けば、やがて日中間の『筆談』が不可能になる日も来る。古典も讀めなくなる。

韓國は、ハングルが主流ではあるが、僅かにではあれ残っている漢字表記の部分は、立派に旧漢字で書かれている。臺灣は、正々堂々、全てが今でも旧漢字である。

嗚呼、中臺韓日が1000年以上に亘って折角共有してきた漢字文化という言語環境と、それによる相互意思疎通をば、日本に於いては戦後の、中國に於いては革命後の『（愚）民主教育』が、いとも簡単に手放そうとしている。探訪子は到底それ（＝言語の環境問題）を看過することが出来ない。だから本稿では（も）出来るだけ多く旧漢字を使うべく努力した次第である（この『ささやかな抵抗』を許容してくれた本誌編集部に感謝する）。

最後に、これがホントの蛇足の蛇足だが、『守禮の地』沖縄には旧漢字が似合う。

（探訪子＝三代俊治）